

浮気防止の見守り係っていう話だったのに性欲処理までさせられて、絶倫旦那に腹いっぱいになるまで犯されたんですけど

体験版

浮気性ドS妻持ち社長×脱力系不憫リーマン

受け：南雲（なくも）

攻め：北大路（きたおおじ）

要素：おじさん攻め、拘束、玩具、アナル舐め、前立腺責め、言葉責め、亀頭責め、結腸責め、中出し、連続絶頂、騎乗位、淫語強要

社内メールで大至急の呼び出しがある時は、だいたい碌なことがない。それでも社長命令となれば無視はできないので、渋々社長室に赴いた。ノックしてドアを開けると、スーツケースを手に持った女社長が、パッとこちらに顔を向けてくる。

「来たわね南雲。アンタに業務命令よ」

「なんすか。もう俺タスクパンパンですけど」

「金は出すから、私が出張に行く1週間、旦那のお目付け役してくれない」

「ええ～？俺が社長の旦那を？」

そして言い渡された業務外も甚だしい指示は、なんと社長のパートナーのお目付け役。金は出すと言われても、そんな厄介そうな仕事は金を貰ってもやりたくない。というより、浮気防止対策に関しては、部下に頼らず自分で何とか解決してほしいものだが。

はあ、と隠さずのため息をついた俺は、断るために社長の説得にかかる。

「自分が出張で心配なのは分かりますけど、1週間ぐらいで浮気しないっすよ、さすがに。まァ風俗くらいは行くかもっすけど」

「どんな相手であっても、あいつのチンコにはまる女が出るのが問題なの」

「その発言の方が問題じゃないっすか？」

「とにかく！詳細はメールで送るから、私が帰ってくるまで徹底的に監視しておいてね！じゃ、これ前金！」

けれども時間に追われる彼女は、入り口付近に立つ俺に封筒を突き付けて、颯爽と旅立ってしまった。断ることに失敗し、しかも無理やりとはいえ金を受け取った俺が、やっぱり出来ませんと投げ出すわけにはいかないだろう。

俺が選ばれた意味は全く分からないが、トップの命令ならば仕方ない。ここは1週間の辛抱だと、彼女と彼女のパートナーが暮らすマンションへと足を運ぶこととなった。

首が痛くなるほど高いタワーマンションの上層階。俺には一生縁のなさそうな高級住宅のドアを開けると、キッチン内で酒の準備をする男に出くわした。どうやら彼が、社長の旦那さんらしい。奇怪な男の侵入に眉をひそめる彼に、俺は名刺を渡しながら自己紹介した。

「初めまして。奥様の会社で人事を担当しております、南雲と申します」

「はあ？何お前、なんで入ってこれてんだよ」

「俺の上司の北大路さんから依頼されて、北大路さんのお守り役として来ました」

「うわ、なんか言ってたかも…。アイツ出張なんだっけ？」

「そうっす。なので奥様が返ってくるまで、今日から一週間よろしくお願いします」

両手で差し出した名刺を片手で受け取った北大路さんは、俺の顔をちらりと一瞥した後、げんなりとした顔でため息を吐いていた。ちなみに社長からのメールによると、気の利く部下を家事手伝い兼自分の仕事のサポートとして家に派遣すると伝えてあるらしい。大分嘘が混じっているし、なんなら家事手伝いをするのは聞いていない。だが、監視役を送りますと正直に言えるわけがないので、この辺は上手く辻褄を合わせる必要があるだろう。

とはいえ旦那さん側からすると、派遣される部下が男なのは不満だったようで、俺の名刺が無残にもゴミ箱に捨てられた。

「なんだよ、世話する奴送るって言われたのに、来たの男じゃん。普通に萎えるわ」

「そりゃそうっすよ。いくら仕事って言っても、ひとつ屋根の下に女は来ないっす」

「しかも気が利くって聞いてたのに、めちゃくちゃ生意気だし。何だよお前、今すぐ帰れよ」

「帰ったら俺も殺されちゃうんすよ、アンタの嫁に」

「まあアイツ、キレると怖えからなあ...」

しかしながら、社長の強引さにはお互い理解がある。同じ苦勞を抱えた俺たちは、一緒にため息をついた。北大路さんからしてもこの事態は不本意だろうが、俺が帰った場合、事実が明るみに出ると俺たち二人に雷が落ちる。つまり、二人一緒に1週間この家で過ごすのは、お互いにとって絶対条件だ。そのために、俺も数日過ごせる荷物は持ってきている。

ちなみに旦那さんである北大路さんも、どこかの会社の社長をしていると聞く。いわゆるパワーカップルな2人は、どちらも見た目からしてエネルギッシュで華がある。北大路さんも40代とは思えないほど若々しいし、これで仕事もできるのだから、放っておいてもモテる人なのは納得だ。過剰な心配とは思うが、彼の浮気を心配する社長の気持ちは分からなくもない。ただし、北大路さんの俺に対する態度はどこまでも塩対応だった。

「ちなみになんですけど、俺はどこで寝たらいいんでしょうか」

「そのへんの床」

「それはさすがに終わってんすよね」

「つつつてもなあ...、アイツの部屋には寝かせられねえし。まあいいか、俺の部屋で寝ろ」

「布団敷いて寝るって感じっすか？」

「はあ？んなもんねえよ。同じベッドに決まってるだろ」

「うおえっ」

「この世の底辺の反応してくんな。嫌なら床だ」

そして今日からは、そんな相手と同じベッドで寝るらしい。マジかよ、顔は良  
いって言っても40のオッサンと添い寝かよ。どうしよう、想像するだけで吐い  
ちゃいそうと一気に気持ちが萎えた。だけれど彼を監視するなら、寝ている間も  
近くに居れる点は好都合でもある。男二人で共に寝る気持ち悪さは拭えないが、  
俺にも一部メリットはあった。

あとは、彼の寝室に置かれたベッドは非常に大きく、俺と北大路さんが2人で寝  
ても、間に十分なスペースが確保できそうだったので安心した。密着して寝るこ  
とになったらどうしようかと思ったが、これなら1週間くらいは耐えられる。よ  
しよし、最大の懸念はなくなったなと、俺は洗濯や掃除を行い、北大路さんより  
少し後に寝室に足を運んだ。

夜は早めに寝る人なのか、23時より前に部屋は暗くなっていた。なので彼を起こさないよう、そっと布団をめくり、できる限り距離を取った場所に寝転がる。そのまま静かに就寝に入ろうと思ったとき、事件が起きた。

北大路さんに背を向けて寝ていた俺の身体に、ぬるっと手が回ってくる。最初は彼が寝返りを打ったのかと思ったけれど、明らかに意思を持った手が、上下の服の間から内側に滑り込んできたので、慌ててその手を掴んだ。

「は！？ちょ、何！？何してんすか！？」

「何って、世話役なんだろお前。俺がオナニーもセックスもできないのはお前のせいなんだから、下の世話もしてくれんだよな？」

「いゝ いっ！！？」

そしてあろうことか、とんでもない世話の指示が背後から飛んできて言葉を失った。いやいや、確かに俺は世話役と言われていたのかもしれないが。それは家事メインではないのか。ベッドの上のことなど、業務になるわけがない。待て待て、指を動かすんじゃない、後ろに腰を引き寄せるんじゃないと、俺はベッドの中でもがいた。

「やっ、その、世話って言ってもっすよ？そっちのお世話は業務内容に入っていないっていうか、俺は聞いてませんし」

「アイツから聞いてないだけで、仕事に入っていないとは言われてないだろ？」

「ひぎゃあ！」

けれども既にヤル気しかない無節操な北大路さんは、俺の首をベロリと舐めてきた。マジか、アンタマジか、男の俺すら食う気なのかと悲鳴が出る。勝手に身体が震えだしたが、北大路さんの手つきはどどんいやらしさを増していった。

「女じゃないってのはイマイチだが、穴はあるしいいよな？お前とヤッても、アイツに浮気とは思われないし」

「そういう問題じゃないっすよ！俺の気持ちとか考えません！？普通は！」

「ここに来た時点です承済みだと思ってたしなあ？さあて、男は初だがどんなもんか」

「そっ、そんなだから家まで俺が派遣されたんすよ！ってか触んなっ！やだやだやだやだ！アンタはよくても俺は無理ッ！！」

「嫌々期でちゅか〜？」

「ガチでキモいって！！」

「まあまあ、おじさんにいっぺん抱かれてみろって」

「やだっ！」

「はあ、うるせえクソガキだな。俺だってお前で妥協すんのは癪だってのに」

「ひっ！？」

とはいえ、俺側は不満しかない。北大路さんが納得できても、俺が腑に落ちる要素はひとつもなかった。なので不名誉な傷がつくのを全力で拒否した俺は、急いでベッドから出ていこうとした。この際、今日からの寝床は床でもいい。

しかしながら、寝室は北大路さんにとって最も整えられたテリトリーだった。なのでどこかに手を伸ばした彼の手に、きらりと光る何かが見えて寒気がした。俺の見間違いでなければ、それは鎖で繋がれた腕輪に見える。

「何それ、ねぇ何それっ！！？」

「これ？お前みたいなじゃじゃ馬を躰ける用」

「なんでそんな本格的なやつ持ってんすか！この部屋エロに特化し過ぎ！」

「そりゃそうだ、エロいことする部屋だからな」

「うわっ、わっ！！」

恐怖におののく俺が顔を青くすると、北大路さんはニヤリと悪い笑みを浮かべた。それが増々怖いし、ただ寝るだけの部屋だったはずが、彼の発言で寝室の意味合いががらりと変わる。

いや、言われてみれば、これだけバカデカイ家だ。それ用の部屋があってもおかしくない。そもそも、客室どころか予備の布団がひとつも無い方が不自然じゃないか。騙された、ここは元々北大路さんの寝室なんかじゃない。エロいことに特化したヤリ部屋だと、今更気づいたところでだ。

最悪だ。一体ここで、誰とエロいことをするんだよ。嫁か？浮気相手か？いやいや、今日は俺とだ。

終わったかもしれないと、気を抜いたのが命取りだった。頭を後ろから押された俺は、身動きが取れないままに手を掴まれて、頭上で腕輪をかけられてしまう。繋がれた手を見れば、しっかりと金具で固定されていて、片手ではどうしても外すことはできそうになかった。



「さ、最低、最低っすよこんなの！犯される、傷ものにされるっ！」

「まあまあ、そうビビんなんて。お前もよくしてやるから」

腕を拘束された俺は、一気に自由度が落ちた。そのせいでバックの体勢にされても抵抗できないし、やばそうなおもちゃ箱が見えても、逃げることもままならない。もちろんその卑猥な箱の中から見たこともないえぐい機械が出てきても、それが何かすら分からないまま時間が経っていく。ぐぼ、ぐぼ、と筒状の玩具に大量のローションが入れられる様子を見ても、何もできないのが悔しいし怖い。

「何すかそれ！マニアックなのとか無理っすから！」

「あ〜、これか？貰いもんで使う機会なかったけど、ちょうどいいからお前で試そうと思って」

「やだやだやだ！！やるなら社長に使ってよ！」

「これはアイツには使えねぇよ」

「嫁相手に使えないのを俺に使うのは無しでしょ！」

「アイツじゃなくても、女は全員無理だって。これ、男専用だから」

「ふああうっ！！？」

けれど、たっぷりと潤った筒が移動した先は、なんと俺の中心部だった。ぬぽんと筒に包まれただけで、萎えていた熱が軽く勃起する。ぬるぬるの中にはヒダがあって、柔らかい突起の壁に包まれるだけで、息が漏れるほど気持ちいい。

「んく...ッ！や、あ、あ...！？」

「おいおい急に静かになるなよスケベ」

「ッ、や、違...！」

「中、えっぐくらいヒダついてるもんなあこれ。軽く動かすだけでイキそう？」

「ひ、あ、あゝ、んん～～ッッ！！」

妙な筒だと思ったら、まさかオナホールだったとは。使ったことのない玩具の中は、人の温かみには欠けていても、人間には出せない気持ちよさがある。ぬぼ、ぬぼ、と卑猥な音を立てながら上下に動かされると、勝手に声が出た。なんだこれは。知らなかった、オナホールってこんなにいいのかと、まだまだ性経験に浅い俺は、きつくシーツを握って快感に耐える。

「んふっ、ッ、は、は、はあうう...！」

「なんだよ、この程度で限界か？どうすんだよ、これでスイッチ入れちゃったら」

「っ、スイッ、チ...？」

「へえ、お前マジで分かってないんだな。まあいいか。ほら喜べ、もっと良くなれるぞ？」

「んんゝ ッッッッ！！！？」

けれど、このオナホールは未経験の俺が使うために用意されたものじゃない。上級者の北大路さん向けに、誰かが贈ったものだ。それが一般的なもののなわけがなかった。

カチ、と機械的な音がしたかと思うと、いきなり大きめのモーター音が聞こえて、ぎゅうっとオナホールが締まった。突然の締め付けに、ガクンと腰が落ちる。なのに締まるだけでは終わらない玩具は、北大路さんが動かさなくても、なぜか俺の熱を扱いてきた。嘘だろ、勝手に動くのかよ、やばい、これはやばいと、逃げるために膝が前に出る。でもオナホールは北大路さんが支えているから、抜け落ちていくことはない。もきゅもきゅと口内で食べられているような感覚に、腰から下の感覚が軽くなって、ぞわぞわと快感がひた走っていく。

「ふぁ、ぁぁっ、んゝ ～～～っ！！うぁ、ぁぁぁ、だめ、だめッ、ん、ぁぁぁっ！！」

「おいおい何逃げてんだよ。初心な南雲君には刺激が強かったか？」

「やぁゝっ、こ、これ、止め、っ、ぁ、ひ、やだ、もお止めてえええっ！」

「なぁに弱音吐いてんだよ。今動かしたばっかだろうが。それにまだ、全部のスイッチ入れたわけじゃねえしな？」

「んゝゝゝ いっっ！！？」

そしてこの未知なる玩具は、まだまだ本領を発揮していないらしい。新たなスイッチの音がしたかと思えば、ぬりぬりと俺の先端が何かに舐められる感覚がした。嘘だろう、まさか最奥にある大きな突起は独自に動くのか。そうか、突起だ

と思っていたのは疑似的な舌だったのかと気づいても、分かってどうにかなる快感ではなかった。

「はふ、う、うあああっ！ああ、やだ、何っ、なにっ！だめ、舐めないでっ、んんっ、んんんんんっ！！！」

敏感な先端をにゅるにゅると規則的に舐められて、自分の口から恥ずかしい声が出る。あまりの気持ちよさから逃げるため、つい腰を後ろに引いていた。でも俺の後ろには北大路さんがいるから、下がるにも限度がある。

やばいくらいに舐められている。見えない舌が俺のいいところを、ずっとずっと舐め続けるなんて狂いそうだ。その舌にも小さな突起がいくつもついているから、粒々が先っぽをランダムに刺激していた。人間には到底与えられない快感に、俺の限界がすぐに訪れそうになる。

「やあ、あああだめだめ...ッッ！！これ、これ無理、ああああああ無理無理無理いいいいっ！！！」

「そうだよなあ。これだけ深く咥えられたら、普通は亀頭が喉に擦れるのに、先のところは舐められてんだろ？しかも吸われて、なのにヌルヌルで」

「ンンッ！！は、はう、う、ぐ、や、イッ、イク、やだ、ああ、イクのやだあっ！！」

「嫌なら我慢してみれば？我慢できればの話だけど」

「んゝうあ.....ッッッ！！！！あ、あ————っ！！？」

でも俺は、なんとか耐えようと思った。まだイッていないなら、まだイク一步手前なら、刺激に慣れればどうにかなる。そう思って、全ての動きのパターンを覚えてやると意識を集中させたのに。また聞こえてきたスイッチの音の後、全く別の振動が加わった。しかも奥の舌の動きも、ただ上下に舐めるはずがぐるぐる円を描くものになって。なんだよそれ、と身構える間もなく強力に吸い上げられたので、俺はあっけなくオナホールの中に射精していた。

「はひっ...！あ、あう、ッ、ッ、っっ！！？」

「っはは！ビビりながらイッた？これ、色々吸い上げのパターンとか変えられんだよ。オナホにしては優秀だろ？」

「うあ、あ、や、止めっ、イッた、今イッたあ...！」

「ん～、でもまだ全パターン試してねえしな。もうちょっと頑張ってみるか？」

「くうううっ！！？」

だけれど、俺の苦難は一度イッても終わりにならなかった。またパターンを変えたオナホールが、もぐもぐと俺を咀嚼する。時々音が出るほど吸われるときは相当きつくて、俺は自然と涙を流してよがっていた。こんな玩具ひとつにいいようにされているのも悔しいし、初対面の男に好き勝手されているのも惨めだ。なのに腕が拘束されているから、無抵抗にイカされるしかない。

ざわざわと中の突起が一斉に震えだした時は、ぶわっと一気に射精感がこみ上げた。でもヒダが絡みつくと筒は吸っては上下に動くし、イッて過敏になった俺の亀頭を舐めまわすし、刺激は増えても減ることがない。

イク、またイク、イキたくないのに連続でイッてしまうと、俺はみっともなくへこへこと腰を揺らしていた。

「いやあああああ！！ああああイクイク、イッ、っんんんんうううっ！！っは、は、や、もおだめ、止めて、止めてえええっ！！」

「まだ100通り近くあるなかの、10パターン分くらいしか試してねぇって。せめて半分くらいはいけるだろ」

「んんっ、で、きな、い、イク、イキ過ぎておがしくなるうう！」

「おかしくなるほど気持ちよくなれて幸せだろ？本当はお前が俺をよくする立場だけど、アイツの部下だし特別な？ほら、大好きな強く吸うやつやるぞ？」

「やゝっ！！待って、それ嫌い、い、イクから、イッちゃ、あっ、あゝ〜〜〜  
〜っっっ！！」

じゅうう、と粘着質な吸い上げの音が長く続く間、ずっと精液が出ていたんじゃないだろうか。自分の中にある精液が全て吸いつくされる感覚に、腰が溶けてしまいそうだ。それが終わっても、柔らかな突起がいつまでも俺をくすぐるから休憩がない。死ぬ、こんなの続けられたら死ぬと、俺はシーツに頭を擦りつけて絶叫した。

「はあっ、はあ、っんんん！！も、だめえええっ...！壊れる、ちんこバカになるうう...！」

「この程度でバカになるかよ。むしろお前の歳なら足りないくらいだろ？諦めてもっとエロくなっとけ」

「んふっ、ふっ、あ、あああああ.....！！ひう、ッ、イク、イぐうううっ...  
！！んは、あ、だめ、溶ける、溶ける、ふ、ふう、うう、ううううううっ！！」

行儀悪くシートを食いしめて、何度も何度もイッた。もうオナホールの中が、ローションと自分の精液、どちらで満たされているのかも分からない。いい男が泣いてよがる姿を見て何が楽しいんだと思うのに、何も言い返せず、イクのも我慢できず、ただただ快感におぼれてしまう。

結局、最終的に全パターンを網羅するまでいじめられたのか、それとも適当なところで切り上げたのか分からないが、北大路さんが満足したところでおしまいになった。それでも数えきれないほどイッた俺の熱はおかしくなっていて、オナホを引き抜かれてからもジクジクとうずいて収まらない。最低、イカせ過ぎだと足を閉じて大事なところを守ったのに、北大路さんは気にせず熱に触れてくる。彼の手が悪戯に先端を撫でてくるのが嫌なのに、些細な触れ合いでだらりと精液を零すほど、身体は淫らに育っていた。

「ふあああああ...！！ん、んっ！」

「うわ、エロいねえお前。いいな、若いと活きがよくて」

「や、めて、もおやだ、ちんこ触るなあ...！」

「なんだよ、散々イッておいて我儘なエログキだな。つか、元々これは俺のサービスなんだってこと忘れんなよ？お前の役目は、ここで俺をよくすることだ」

「うああっ！？」

でも、俺の身に降りかかる不幸はこの程度では終わらない。俺の精液を纏わせた指は、あろうことか俺の尻に入っている。ふざけんな、マジかよ、この人本気で俺とやろうってのかと、俺は慌てて前に足を動かす。

「や、やだ、そんなところ入れてもアンタは気持ちよくないって！」

「それは入れてみないと分からん」

「っ、ひどい、絶対痛い、終わったって俺え...！」

「まあまあ待てよ。相手はこの俺だ。男だとしてもどうにかなる」

「うう～～...」

追加のローションが臀部に落とされる感覚に悶えながら、静かに涙を流す。なのにエロい指をもつ北大路さんは、俺の後ろに指を埋めながら、くにくにと過敏な熱も揉んでくるからズルい。そっちは責められすぎて、何をされても感じてしまうのに。前を触られたら、後ろを弄られているという最悪な事実から意識がそれてしまう。

「ふは、は、あう、ううん...！」

「ほ～ら、気持ちいい気持ちいい。後ろもさっきよりほぐれてきてる。いいな、身体も賢い奴は好きよ、俺。さすがアイツが見込んでるだけはある」

「んっ、や、もうや...っ！」

「大丈夫だって、もうかなり奥まで入ってるから。ローションあるし痛くないだろ？お前は気持ちいいこっちだけに集中しとけばいい」

「んゝんんううっ！んっ、ひ、ッッ！！」



男とは初めてだと言っていたくせに、色々とスムーズな北大路さんが怖い。けれど恐怖で萎えればいいのに、亀頭を2本の指でゆっくり擦られたりすると、腰から背中一帯がゾクゾクして泣きたくなる。気持ちいい、しかも安心して気持ちよくなるレベルを超えて、どうしようもないくらい感じている。だめなのに、上司の旦那に抱かれそうになっているのに、受け入れたらヤバいと分かっているのに。つるりと亀頭を指で一周されたら、言葉が掠れて出てこなくなる。

時々、液の滴る筋をそっと撫でるのは何だよ？エロい、エロすぎるんだって。腰が全部痺れて使い物にならない。ガクガクと腰を揺らしている場合じゃないのに、何もかもを投げ出したくなるほど感じてどうする。ダメだ、流されるな、そうだ、前に意識を向けるからいけないんだ。後ろだ、圧倒的に違和感がある方に意識を向けたらいいんだと、そう思った矢先。くりりと北大路さんの中指の腹が掠めた場所から、別の違和感が生まれてしまった。

「あ...！？え、う、うっ...！？」

「ん？どうした、ここがいいのか？」

「ひあっ！！？え、えっ、えう、や、やだ、そこ触っ、ん、んんっ！」

くに、くに、と狙いを定められてからは、違和感が快感に変化していく。嘘だと思いたい。なんで俺は、ケツを弄られて感じてるんだ。ありえない、俺は別にそういう趣味はないのにと、慌てて肩に口を当てて声を押さえる。けれど、身体の反応は止められなくて、びく、びくっと腰が大げさに揺れてしまう。

「はふっ、う、うううんっ！んふ、ふっ、う、う〜〜〜！」

「へえ、何お前。ケツでもそんな感じるわけ」

「っ、わ、かな...！あ、あう、や、そこばかりっ！うう、しっこい、しっこ  
いってえ...！」

「そうなんだよねえ、おじさんってしっこいのよ。だからお前が嫌って言っても  
やめてあげられないんだわ」

「っっ！！く、ふううう`う`うんん...！！」

しれっと指を増やされた時、本当ならもっと苦しい気持ちになるはずだった。な  
のに的確にいい場所を突いてきたその指先に、ぐうの音も出なくなる。最悪、何  
感じてんだよ、もっと文句言えよと思うのに、ヌルつく指先がいい場所を擦る刺  
激に陥落しかけていた。

まるで性器を、裏側から擦られているような不思議な感覚だ。ちょっともどかし  
いけれど、確かに気持ちよくて、慣れていないから怖いのに、もっとしてほしい  
とも思う。きゅん、と孔が締まるのが恥ずかしい。刺激を求めて中がうごめくの  
が嫌だ。

「ひう、ん、んっ、や、あ、う、ううっ」

「やらしいねえ南雲君たら。初めてなのにお尻で感じちゃって」

「っ、ちが、う、違うう...！」

「あっそう？じゃあやっぱり、こっちの方が好きか」

「んあ`っ！？あう、んんんっっ！！ダメそれ、やっ、ひ、ひううんっ！！？」

だけれど俺が後ろで感じるのを否定したら、あからさまに感じる方の刺激を強められた。ぐっと中指と親指で亀頭の皮を両側に広げられて、さらけ出された粘膜を人差し指でぬちぬちなぞられると、頭にビリッと電気が走る。きつい、なんだよそれ、なんでそんな責め方も出来るんだよと、思わず目を見開いて全身を硬直させた。でもその緊張をほぐすように、北大路さんが俺の背筋を下から上に舐め上げてきたせいで、今度は身体の力が抜けていく。緩急がヤバい、エロい、舌も指もエロさが突き抜けていると弱気になっていたら、中を蹂躪する3本目の指の侵入も許してしまっていた。

「うは、あ、ああああ...！！や、ああ、だ、め、エロくなる、もお嫌だあ...っ！」

「なあにかわいいこと言ってんだよ。ほらほらそんな事言ったら、もっとエロいことされるぞ？」

「んやああっ！！あう、っ、ひ、指やばいいいい...っ！ん、だめ、もおだめ、あああぎもち、い、やだ、なんで、なんでえっ...！！たす、け、で、だめ、だめえっ！」

「んん、ほらエロいエロい、ぐちゃぐちゃ言ってるよお前のここ。手マンで感じてビクついてる。マジで女みたい」

「っ、〜〜〜ッッ！！や、あああゝ あゝ っ...！し、ないで、女じゃない、っ、あ、あうううっ！！？」

1本の指だけでも巧みに俺を気持ちよくした達人が、3本の指を入れてきたんだから、快感の増え方も3倍だった。いっそ痛ければ良かったと思うほど、それぞ

れの指でバラバラにいい場所を引っかかるのが気持ちいい。ヌルヌルヌル、としつこく擦られるほどに、バカみたいに腰が上下した。あからさまに感じている仕草が嫌なのに、北大路さんの指テクがエロすぎて頭が真っ白になりそうだ。でも俺自身でそう思っても、やはり別の人から指摘されると悔しさが勝つ。

「うううっ！んんっ、ンっ、あ、は、はっ、はう、っ、っくうう...！」

「中、そんなに気持ちいい？男でもよくなるって都市伝説じゃないんだな」

「ちがうっ、良くない、よくないいいっ！」

「どうでもいい嘘ついてんじゃねえよ。ああ何？それともお前、指じゃないのがいいっておねだりしてんの？」

「っ...？な、なににっ、ん、んんっ！？え、や、あくっ、ッ、ッッんんううう！！？」

ただ、変に悪態をついたのは良くなかった。謎の解釈をした北大路さんは、あれほど溶かしていた俺の中からぬぼんと一気に指を引き抜いたかと思うと、俺の頭を後ろから押して、腰を高く上げる体勢にしてきた。しかもこの格好になった直後、俺の臀部に湿り気のある息がかかってぞっとする。

おいやめろ、嘘だろ、まさかアンタと振り返る間もなく、ねとりと柔らかいものが俺の孔に触れた。見なくても分かる。俺は今、尻を舐められている。嫌だ、そんなところ舐めるなと嫌悪感があるのに、まさかと思うほど気持ちがいい。ぬぷりと舌先が入ってきたときなんて、声を我慢する余裕すらなくなって、必死で前に前にと身体を前進させた。

「やあゝ ッッ！！！？な、舐めるなっ！！あ、あっ、だめ、ホントにだめ！や、やあああっ！！」

「はは、ガチで逃げんなって。感じすぎてビビってんの？ダメだろ、そんな見え見えの逃げ方したら。俺にいじめられたい？」

「ひう、う、う、ああ、ああああああ...！！だ、め、うううっ！んふっ、ふっ、ふ、うゝ うううんっ！」

でも俺が感じているのもバレバレで、むしろさっきより楽しそうな北大路さんから、がっちりと腰を抱えられてしまった。脱出手段を失ってから、好き勝手に舐められる時間が始まったせいで、余計に惨めになる。北大路さんに抗えない俺は、ただシーツを握って、歯が折れそうなくらいシーツを食いしめて、変態じみた格好で弄ばれる屈辱に耐えた。なのに感じるのはまぎれもない事実だから、時に言葉でもいじめられて、増々羞恥心を煽られていく。

「ンふうううう...ッッ！はふっ、ッ、ん、んひ、い、いゝっ、ひうっ！」

「んん、すごいよお前のここ。くぱ、くぱ、って広がって誘ってる。自分で分かるだろ？もっと舐めてえっておねだりしてんの」

「んや...っ！そ、んな、こと...！」

「違う？でもさあ、お前のここだらっだらになってる。感じて感じてどうしようもないですうって降参してんじゃん。何これ？言い訳できないって」

「くひ、っ、あ、だめ、先っぽだめえええ...！よわ、い、から、先っぽ弱いからあ...！」

「ん〜？そうか？じゃあ先っぽくちゅくちゅされんのと、お尻舐められんのどっちがいい？」

「ッ...！？や、だ、どっちも嫌だぁ...！終わりたい、もう終わりたいっ！」

「分かった。なら尻だけ舐めるな？」

「ひううっ！！？うは、は、あ、吸っちゃ、あ、あああああっ！！んひ、だめだめ、舐めないで、中舐めっ、んっ、んあああああっ！やあ、許して、もお許してえええっ！！」

心の弱点も、身体の弱点も、あますことなく引きずり出されて責められる。ただ勢いでやるだけのセックスにはない、芯までグズグズにされる感覚が俺を襲う。この段階で俺は、もうひどくても痛くてもいいから、いっそ早く犯して終わってくれと思っていた。それぐらい、自分がこれ以上惨めな目にあうことが限界だった。なのに彼の気まぐれでいつまでも引き延ばされて、もう前を触られて気持ちいいのか、後ろを舐められて気持ちいいのかの境界すら曖昧になっていく。オナホで散タイカされてから、ずっとお預け状態なのも堪えていた。際限のないぬるま湯の快感に、強引に沈められている。苦しい中でもぎりぎり呼吸を許されるけれど、それも全て北大路さんの手のひらの上だ。

「うはぁ...ッッ！！はぁ、はぁ、はぁっ、っっ...！！」

「おいおいへばってんなよ。まだ入れてもねえのに」

「っ、う、ん、んんっ！！？や、なんで、指もうっ」

「勝手に終わりにしてもらっちゃ困るんですけど。ほら、腰落とすなよ」

「んんっ！っく、あ、あああああ...！！あふ、うう、んっ、ひ、あ、あ、あっ」

「さっきより敏感になってんな。舐められるのがそんなよかったかよ」

「っ、くうううん...ッッ！！」

せっかく舐められるのが終わりになったと心を緩めても、すぐに指が入れられる。ひどい、俺は終わりたかったのに、せめて休みたかったのにと首を振っても、なんの意味もない。それどころか力の入らない腰を上げろと言われる始末だ。信じられない、腰が落ちるのはアンタが無茶苦茶するせいだと言いたいが、言葉と違って甘い指先が発言を遮っている。

しかも悪いことに、舐められた後の方が、中が過敏になっているじゃないか。なんでだよ、どうして俺じゃなくて北大路さんの都合の良い方に身体が傾くんだと嘆くが、もはや言いなりな身体は言うことを聞かない。気を抜けばガクンと腰が落ち、それを無理やり引き上げられ、またいい場所を揉みこまれて感じさせられる。

気がつけば、とめどない快感がひっきりなしに訪れていた。ゾクゾク、ぞわぞわとした感覚が、徐々にただの気持ちいいで説明できる強さではなくなっていく。嫌だ、感じたくない、これ以上感じたら何かが起こる。そんな危機感が芽生えてきたせいで、自分でも戸惑うこの感覚を、北大路さんに悟られませんかようと必死に祈っていた。

「ふあ、あ、あああああゝ あっ...！ああう、う、んんっ、っふ、ふ、ふう、うううっ！」

「なあ、声エロくなってんだけど？そろそろ限界？もう無理？」

「ッ、ッ...！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー